

農学部 3年

藤島 幹汰

ペルー、コスタリカ

2019年2月26日-

2019年4月3日



渡航概要と内容

私は元々おもろチャレンジで、ウガンダにてカメレオンを始めとした爬虫両棲類の生態調査を行う予定だった。しかしその後、隣国コンゴ民主共和国でのエボラ出血熱流行の知らせを聞いたことから、リスクを考慮して渡航先と調査計画への変更を希望し、委員会より承認をいただいた。新しい渡航先はペルーとコスタリカ、調査テーマは「サンゴヘビ類に擬態する無毒ヘビ群の地域差」とした。ペルーでは入国してすぐに、Fauna Forever という NGO 団体の調査に1週間参加した。この団体はタンボパタ地域の熱帯雨林の生物相をフィールド調査によって継続的にモニタリングすることを目的としており、私は爬虫両棲類の調査を行っているチームに同行させてもらった。ここでは生物の生息密度を調べる方法や、ワニの調査法など自分にとって新しい調査手法を学んだ。さらに、1週間行動を共にした異国の研究者たちとの対話を通じて、地球の裏側での研究事情や、彼らの信念について知ることができた。計画ではサンゴヘビとそれらに擬態するヘビの行動や色彩を調べるつもりであったが、実際に現地でフィールドに出てみると、ヘビ自体そう頻繁に見られるものではないと分かった。

Fauna Forever での滞在中、サンゴヘビは1匹のみ、サンゴヘビ擬態のヘビに至っては1匹も見つけることができなかった。熱帯地域は生物の多様性は高いが、それぞれの種に遭遇できる頻度は低いという事象は、世界共通であるようだ。したがって、この旅では現地で見つけた様々な爬虫類の行動を観察し、将来面白い研究に発展させられそうなテーマを自由に探すことにした。その後私は高山の町クスコを經由し、次のフィールドであるマヌーへと向かっ



タンボパタ川をボートで移動し、調査を行う

た。その間私は1人で初めてペルーの街を歩いたのだが、言語の不自由と人種の違い、治安の悪さから、いくらかの孤独と不安を感じずにはいられなかった。現地人の早口のスペイン語が聞き取れないので、店や長距離バスの受付等でいちいち時間がかかるし、アジア人は珍しいためか街を歩けば"Chino! (中国人)"と呼ばれ、じろじろ見られることもあった。長い車移動の後、マヌーの森についた時には自分の得意なフィールドに来られたことに対し安堵と高揚感がこみ上げた。どこの国であっても、人の



Fauna Forever の調査にてリクガメの一種を見つけたところ。

いない鬱蒼とした森はかえって私に安心感を与えてくれる。そして私のやることはどこだって基本的には変わらぬ、爬虫両棲類探しのだと再認識した。マヌーでは個人で森を所有している宿に泊まり、主に夜間、森の中の小道を歩き回ることによって爬虫両棲類を探した。相変わらず森ではヘビに遭遇することは稀であったが、宿の前の沼では毎晩4、5匹の水棲のヘビの一種が見られた。そしてこの種では、多くの個体で特徴的な対捕食者行動が観察された。ペルーで調査に出られる最後の夜には、私が切望していた水棲のサンゴヘビの一種を奇跡的に目撃したが、沼地という場所の悪さと、興奮のあまり冷静さを欠いていたことから、それを取り逃がしてしまった。その深い悔恨を胸に私はペルーを後にし、次なる目的地、中米のコスタリカへと飛んだ。

コスタリカでは日本の友人ら3人と合流し、調査を続けた。ここでは自動車を借りて5か所のフィールドを回ったが、周りの車の運転が荒く、いつ事故に巻き込まれるかとひやひやした。ある日は、20年間1人でコスタリカで昆虫の研究を続けてこられた西田賢司さんという方と行動を共にし、自分とは別の分野のプロに多くのことを教わる事ができた。別の日にはこれまた個人で20年以上コスタリカの両棲類を研究されている Brian Kubicki さんと共にフィールドに出て、自分たちだけなら見つけられなかったであろう美しいカエルを野外で観察し、貴重なお話を伺う事ができた。ある場所で私たちは他のヘビを捕食しているヘビを見つけ、貴重な食性データが得られた。旅の終わりにかけて、私はペルーでサンゴヘビを取り逃がした苦い経験を生かして、同じような状況で見つけられたサンゴヘビの一種を捕獲・撮影することに成功し、汚名返上を果たした。



コスタリカにて、念願のサンゴヘビとともに。

コスタリカはエコツーリズムが盛んであることから、治安は比較的良く、その点に関してトラブルはなかった。しかし旅行の最終日の1週間前に私たちは自らトラブルを招いてしまうこととなった。別々の場所で長期で旅行をしていた私たちは、現地での支払いや現金の入手をクレジットカードに頼っていた。高額のリントカー代やコスタリカの物価の高さから費用がかさみ、さらにクレジットカードの仕様を正しく理解していなかったことから、運悪くほぼ同時期に4人とも

カードの限度額を迎え、所持金がピンチになったのである。そこで私たちは即日受け取りが可能な送金サービス RIA を利用しようとしたのだが、そのウェブサイトで受け取り場所として指定されていたいくつかの場所のどこへ行っても、そのようなサービスは存在しないと言われる始末であった。結局、持ち合わせの日本円を換金して事なきを得たが、長期の海外旅行では第2 第3の現金入手手段を用意しておく事が重要だという手痛い教訓を得た。

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今までに私は日本国内だけでなく台湾やマレーシアなど海外のフィールドでも何度も生き物を探してきたが、今回の渡航は今までで最も感じる、学ぶことの多い旅であった。まず、全く新しい土地で、図鑑やテレビでしか見たことのなかった多種多様な野生生物を見つける喜びは非常に大きかった。さらに、現地の野生生物研究者たちと出会い、語り合ったことが私にとって何よりも貴重な経験だった。彼らは金銭的な問題と闘いながらも、ひたすらフィールドに出て、大好きな生き物の研究を続けてきた。彼らは大学や博物館といった組織には所属しておらず、それぞれのやり方で生活を成り立たせており、野生生物研究者は大学等のポストにつかねばならない、という私の固定観念を変えた。彼らとの交流が、私将来を考える上での選択肢を増やしてくれたと思う。またコスタリカでは、私と行動を共にした、同じく爬虫両棲類研究を志す1人の同級生の友人の存在が大きかった。彼も私と同じく初めてコスタリカに来ていたが、彼は私よりもずっと入念に、ネットや本で現地の生き物情報を集め準備して来ていた。その情報収集能力に加え、これまでの経験と持ち前の身体能力と頭の回転の速さを生かしてすぐに現地のフィールドに適應する様には舌を巻いた。私は、同じ条件で未知のフィールドに飛び込んだのに現地でフィールドワーカーとして差をつけられた気がして、対抗心を掻き立てられた。海外で1人で戦うのも良いが、このように敢えて友人と行動を共にしたことで良い影響もあるのだと知った。このような同じ情熱を持った、競い合える人間が身近な同世代にいることを幸運に思う。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航により、中南米での爬虫両棲類の研究事情を多少なりとも知ることができ、面白いトピックもいくつか見つけることができた。これを直接自分の将来の研究に繋げられるかは分からないが、現地の研究者から学んだ新しい視点は、私のこれからの研究にとって有益だと思う。また爬虫両棲類関係以外にも、地球の裏側の人々と話し、彼らの口から現地の様々な問題や人間事情について聞いたことは、自分のバイアスを取り除き、世界をより深く理解するのに大いに役に立つと思う。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

とにかく興味のあることを追求すると同時に、いろいろなことに対してアンテナを張り、現地では出会う人との対話を積極的にする旅であってほしい。旅の時間はあっという間に過ぎていくの

だから。

■ 主な奨学金の使途

- * 渡航費
- * Fauna Forever インターン費用
- * 宿泊費
- * 食費
- * 海外旅行保険 など



Fauna Forever の仲間たちとともに